

池田古墳 発掘調査 現地説明会資料

平成19年3月10日(土)
朝来市教育委員会
埋蔵文化財センター

1、はじめに

市内和田山町平野にある池田古墳は、但馬の中で最も大きな前方後円墳です。昭和 46 年 (1971) 国道 9 号線バイパス建設に伴って、城ノ山古墳とともに発掘調査が行なわれました。その結果、葺き石・埴輪・周濠を備え持つ古墳であることが改めて確かめられました。その後、昭和 52 年 (1977) 墳丘の各所で範囲確認調査が行われ、くびれ部の葺き石と埴輪列が検出されています。昭和 57 年 (1982) 以降、10 回にわたって確認調査が行われています。今回の調査は、池田古墳の基礎データを得るために、国庫補助事業として発掘調査を実施しました。

2、現在の状況

墳丘はかなり旧状がかなり損なわれており、もとの姿をうかがい知ることはできません。これは明治 40 年前後に J R 山陰本線敷設に必要な土として、その多くが持ち出されたためです。埋葬施設があったと思われる後円部も大きく削平されています。そのため、埋葬施設の詳細は不明ですが、ここから 4 k m ほど離れた高田地区の墓所に長持型石棺の破片があります。長持型石棺は「王者の棺」と呼ばれ、近畿では首長の墓である大規模な古墳に納められていることがわかっています。これらのことから、但馬の王墓にふさわしい池田古墳には、高田地区の長持型石棺が埋葬されていた可能性が高いと考えています。

池田古墳は丘陵斜面につくられているため、後円部が高く、前方部が低くなっています。以前の調査から、周濠は水をたたえていたと考えられ、周濠の水位を調節するために、中に仕切りの堤があったようで、それにあたるものが前方部側で確認されています。

3、調査の概要

調査は、後円部と前方部がつながる部分（くびれ部）に調査区を設けて行ないました。その結果、新たな発見が 2 つありました。

1. 墳裾を示す葺き石

古墳の墳裾を示す葺き石を確認しました。現在の地表面から 1.6~1.8m 下から見つかりました。これにより、後円部の大きさを明確にすることができました。葺き石は川原石、山石の両方を用い、根石には少し大きい石を使っています。

2. 造り出しの確認

造り出しとは、古墳の本体から飛び出た方形の出っ張りのことで、大阪や奈良にある同じ時期の前方後円墳に多くみられるもので、古墳のまつりをする場所と考えられています。池田古墳でもその存在が予想されていたのですが、今回はっきりとした形で確認できまし

た。造り出しは前方部にとりつくもので、石で囲まれていたようです。調査区の範囲では全体の様相は明らかにできませんでした。

3. 出土した遺物

今回の調査ではたくさんの埴輪が出土しました。これらはその大多数は、もともと立てられていた位置から離れて倒れ、バラバラになった状態で出土しています。種類は、円筒形が圧倒的に多く、他に朝顔形・壺形・家形・衣蓋形^{きぬがさ}・盾形^{たて}・鳥形がみられます。

中でも造り出しからは、家形のほか多くの形象埴輪が出土しています。残念ながら、元位置で据えられた状態のものはほとんどありませんでした。

鳥形埴輪は、鶏の頭部分と考えられ、但馬で初めての出土です。また、羽根を刻線で表現したものもあります。

3、まとめ

今回の調査では、墳裾（墳丘基底部）が明確になったこと、造り出しが確認されたことが大きな成果です。後円部の直径が約 76m、前方部の幅が推定で約 72m、前方部の基底部が不明であることから断定できませんが、これまで約 141mとしてきた全長が、少し短くなり約 136m前後となる可能性が出てきました。つくられた時期は、出土した埴輪から 5 世紀初め頃、史跡茶すり山古墳よりも古いと考えられます。

今後の調査に、より大きな成果が期待されます。



位置図



鳥形埴輪



家形埴輪



葺き石と現在の墳丘の位置



葺き石の様子 (左側が造り出し、右側が墳丘)